



TITLE:

圖版第二 譚書彙編第一期

AUTHOR(S):

CITATION:

圖版第二 譚書彙編第一期. 東洋史研究 1958, 17(3): [1]

ISSUE DATE:

1958-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148109>

RIGHT:

譯書彙編第一期

目 錄

政治學	美國 伯益司 著
國法汎論	德國 伯倫知理 著
政治學提綱	日本島谷部銑太郎 著
社會行政法論	德國 海爾司烈 著
萬法精理	法國 孟德斯鳩 著
近世政治史	日本 有賀長雄 著
近時外交史	日本 有賀長雄 著
十九世紀歐洲政治史論	日本 酒井雄三郎 著
民約論	法國 盧 騷 著
權利競爭論	德國 伊耶陵 著

簡要章程

是編所用以政治一門為主如政治行政法律經濟政史政理各門每期所出或四種或五種間附雜錄
政治諸書乃東西各邦強國之本原故本編專先刊行此類至兵農工商各專門之書亦有譯出者以後當陸續擇要刊行
是編之外尚須刊列譯成全部之書目錄均附於後
是編由同人捐資刊辦尚祈同志之士贊助資助當酌量贈書以酬盛意

定價

月刊 冊洋兩角 半年六冊洋壹元壹角 全年十二冊洋兩元 郵費在內

購閱 定閱本編可函向譯書彙編發行所掛號每期當按址寄送外埠可就街向各代派處購取
贈閱 價銀必須先付掛號後若不付銀及已交滿所付之價均一律停止不送外埠同
則 一代派處照定價提三成作為酬勞

本編要目

政治學 三種
行政學 三種
法律學 三種
政治史學 三種
政理學 兩種

譯書彙編

第一期

每月一回華歷十五日定期發行

禮が、荀子の梁論によつて生まれたとする見解は、もし文献に内
する性質を重視するという立場に立つならば、郷飲酒禮の文體が、
荀子のそれより新しいという論證がなされねば、成り立たないであ
ろうが、事實はむしろその逆であることを思わせる。

なおまた著者は、毛鄭以來の舊説を破するに急なるあまり、それ
らの舊説の理解について不十分な點があること、前にもふれた通り
であるのは、やはりこの書物の欠點と思われる。あえて微細な例の
一つをあげれば、「興」の概念に對する歷代の解釋をあげたうち、漢
の鄭玄について鄭小同の「鄭志」をあげるが、これも實は鄭玄の説
であること、いうまでもない。

また舊説を破するに急なるあまり、舊説をなすだけ自己の解釋に
違ざけて見る傾きも、ないではない。たとえば「興」の修辭が氣分
象徵であることを、確定したのは、著者の功績の一つである。しか
し著者の方向の解釋が、舊説の中に全くなかつたかどうかは、疑問
であつて、「詩解における二千數百年の蒙を拂つた」という著者の
自負は、やはりすこし性急であるかも知れない。著者が著者の見解
と異なるものとして列舉された從來の學者の見解の中にも、著者の見
解に近く私には讀み取られるものがあるのであつて、もし著者が引
かれなかつたものをあげるならば、朱子が論語の子罕篇の「唐棣の
華、偏として其れ反せり」云云につき、「六義に於いて興に屬す、
上の兩句は意義無し、但だ下の兩句の辭を起すのみ」といつている
のを、附記し得る。

(吉川幸次郎)

湖南時務學堂初集 (圖版第二)

光緒二十四年(一八九八)長沙で出版。内容は學約、界説、
答問の三部からなる。學約は時務學堂の學約、界説は讀孟子
界説・讀春秋界説を指し、何れも梁啓超の執筆にかかる。答
問は時務學堂の學生の質問とそれに對する總教習梁啓超、分
教習韓文舉、葉覺邁の應答である。學約、界説は飲冰室文集
にも収められ、答問は翼教叢編、覺迷要録に抄録されている。
しかしそれは抄録であつて、この書によつて始めて知られる
ものが甚だ多い。ことに學生の誰がどのような質問をしたか
は、この書だけでしか判らない。珍重すべき一文獻である。

譯書彙編第一期 (圖版第二)

明治三十三年(一九〇〇)十二月六日東京で發行。譯書彙編
は江蘇出身の留日學生が中心となつて發行した雜誌であつて
「留學界雜誌の元祖」といわれるものである。この雜誌は廣
く政治一般を對象として、歐米並に日本の著述の翻譯と紹介
を目的としている。日清戰爭後には、洋務的ないわゆる西學
よりも、變法的ないわゆる西政に對する關心が高まつてくる
が、この雜誌によつて一應の實を結んだということも出来る。
啓蒙的な雜誌であるけれども、そこに譯載されたルソーの民
約論・モンテスキューの法の精神は、變革思想を鼓吹する上
に重要な役割を果している。これはその創刊號の表紙と目次
である。